

道義国家の復権を目指して

西村茂樹先生が創設された、東京脩身学社に始まる日本弘道会の活動は、明治九年以来百三十年を閲する。気も遠くなるほど永いそのご活動を思うとき、私は心の底から湧出する敬意を禁じ得ない。国民道義、教育の発展を目指し、これほど永く、しかも微塵の揺らぎもなく活動し続けてきた組織は、他に例を見ないのではあるまいか。

いわゆる「学者文化人」たちは、戦後の「新教育」に蝟集して、醜く「敗戦利得」を争った。ために今日我が国の教育は、これ以上荒廃のしようのないところまで荒廃しきってしまったのである。

今、信頼すべき安部内閣が誕生し、我が国の歴史に新しいページが開かれようとしている。一言にしてこれを尽くせば、それはポツダムイデオロギーの克服ということになるろう。しかし、何を抛り所に、この克服のための戦いを展開していくかを思うとき私は、百年を超える永きにわたり、揺らぐことなく道義国家建設を目指して活動し続けてきた日本弘道会の歩みの中にこそ、その抛り所が存在すると確信する。日本弘道会のすべての出版物、その歴史を深く学ぶ中で、私もまた新内閣の新しい教育政策に、現場人の一人としてご協力申し上げたいと考えている。学ぶべき対象が確定するという事は、あらゆる人間に心躍るような喜びを与える。この度の百三十周年記念号を契機に、私は余生のすべてを捧げてそれらの出版物を学び続けたいと決意しているのである。

また、会長の鈴木勲先生は、今のご健在で、道義国家建設のため力を尽くしてくださっている。私は、東京都公立小学校の教員であった時代に、各種印刷物で先生の論文やお写真に接していた。当時先生は文部省で活動しておられた。振り返れば、先生のおられた頃の文部省は、戦後教育のマイナス面を克服すべく、戦後史全体の中で最も果敢に抵抗していた時期だったのではないかと思う。その後、文部省が何故今日のごとき「ゆとり教育」にまで入り込んでしまったのか、難しい問題ではあるが、今こそ先生のご指導を全国民が切望している。私もまた、改めて先生のご馨咳に触れたいとの思いを深くするのである。ご高齢の先生ではあるが、国家のためご自愛下さるよう、心からお願い申し上げます。

我が国の教育を、ここまで荒廃させた本当の原因は、誤った「児童中心主義」にあったと私は考えている。デューイは「子供は教育の主体であって客体ではない」と言っている。自らを自己教育の主体として鍛え上げることのできる人間の育成こそ教育の目的なのだから、それは決して間違った考えではない。実はデューイは明治元年には、すでに九歳だった人物である。従って彼の教育理念は、戦前すでに我が国に流入していた。しかしその児童中心主義は、当時の国内環境に適当に位置づけられ、教育荒廃の遠因を為すというようなことはなかった。

ところが、戦後この「児童中心主義」が占領政策と一体をなすものとして導入されたとき、

それは「子供の内面からひとりで芽生えるものに過大な期待を寄せ、教え込んでいくことにアレルギー的警戒心を抱く」傾向を生み出してしまった。私はそれが、「ゆとり教育」の、本当のオリジンだったと考えている。

「子供は教育の主体」であることを私は否定しないが、しからば私は尋ねる。乳飲み子は、いかにして教育の主体たり得るのかと。小学生も、三年生くらいまでは、「先生にさえよく思われれば、仲間になんと思われようと構わない」という親や先生絶対の時代である。この時期には、子供達に「服従の教育」が行われなくてはならない。「殺すな」「盗むな」「嘘をつくな」このような価値を、徹底的にたたき込んでおかねばならないのである。デューイの理念を受け入れるに当たって、この発達段階という発想を見事に欠落したところに、戦後教育荒廃の本当の原因があったのではないだろうか。

またデューイのプラグマティズムは、価値を規範として教え込むことを否定し、それが子供の中から、独りで芽生えて来ることに大きな期待を寄せた。彼の「為すことによって学ぶ」という言葉は、それを端的に物語っている。

しかし規範は、成熟した世代が形成したものを、未成熟の世代に持ち込むというのが原則である。その手法は慎重でなければならず、子供の発達段階を尊重し、その成長に従って徐々に後退するものでなければならぬ。ついには「老いては子に従う」というところまで行って逆転するのであるが、規範が、成熟した世代の中で構築されなければならないことは否定できない事実である。

論語、孟子等を素読することも、規範を継承する一手法だったのであるが、戦後それはほとんど行われなくなった。特設「道徳」は、「修身」との違いを弁明することに急であるあまり、規範を教え込むことを極度に恐れ、今日のごとく形骸化してしまった。

「子供に道義を教えるてはならない。それは、子供の中から独りで芽生えるものではなくてはならないのだ」これが前後六十年を貫く中心的イデオロギーであった。これで国民道義を維持できるはずがない。

「道義」という言葉さえ白眼視されがちな今日、西村茂樹先生の理念に立ち返り、その発達段階に配慮しつつも、大胆に規範を子供達に持ち込んでいくことの重要性が痛感されるのである。

(平成 18 年 9~10 月号 日本弘道会)